日本の季節の移ろいとグラフィックデザインについての研究

Research on the Graphic Design inspired by Japanese Seasonal Changes

■ 李 雪 Xue LI

愛知県立芸術大学大学院　今尾泰三研究室

Aichi University of the Arts

■ キーワード：グラフィックデザイン、季節、植物、伝統色

はじめに

日本人は自然と共存して様々な年中行事を行い、継承してきた。本研究ではその文化的背景を考察し、人々が生活の中で季節を感じることができるようなグラフィックデザインによる作品制作を行うことを目的とする。日本人の社会生活の中に溶け込んでいる、季節の変化を楽しむ文化とデザインこそが、これからの現代社会において自然を享受し、季節や時間を楽しみ、明るく前向きに生活する上で重要となるはずだ。

1. 研究背景

中国では、四季に対する社会活動やデザインの関連性について、あまり敏感でないといえる。特に現代社会では、四季の変化を気にせず季節外れの生活をしている人が多い。例えば、冬の時期に西瓜、イチゴのような夏の果物や野菜を食べ、夏の時期に火鍋を食べたりする。とはいえ、私が生まれ育った北京は、季節の変わり目がはっきりしていることから、四季の変化には敏感であった。日本にも同様の四季があり、古来より日本人は季節の移り変わりに敏感に反応し、四季を大切にして生活をしてきた歴史がある。そして、ものづくりにおいても様々なものに四季を織り込んできた。例えば、日本画、俳句の季語、和菓子、あるいは花見などの日常生活に根差した文化がある。特に和菓子は、季節を先取りして表現しているものが多く、日本の伝統菓子が今なお現代に伝承されていると言える。日本人は春になると桜餅をつくり、春らしい広告やパッケージ生み出し、季節の変化を自然に受け入れている。

また、日本の伝統色も日本独特の空気感を連想させる。例えば、梅雨の紫陽花、浴衣、夏の夜空を彩る、花火などがあげられる。竹林や深い苔の森をハイキングする時、視界に入る色の全てが緑になり、自らも色と一体化する感覚がある。また、満開の紫藤棚の下で深呼吸をすると、紫藤の花の香りが藤色に感じたこともある。これらは日本独自の空気の色といえるだろう。日本の歴史や自然とともに育った様々な伝統色の文化、それぞれの色が持つエネルギーは個性的である。日本のこのような色彩に着目し、天候や時間の変化により移りゆく自然環境や景観構成要素の違いと、色とそれを取り囲む周辺環境との関係、心に与える影響を明らかにしていく。

2. 季節について

2.1. 二十四節気

二十四節気は、太陰暦を使用していた時代に、季節を現すための工夫として考え出された。一年を二十四に等分し、その区切りと区切られた期間とにつけられた名前である。現在でも季節の節目を示す言葉として使われている。さらに日本には七十二候(しちじゅうにこう)という 72 の季節がある。季節ごとの鳥や虫、植物、天候などの様子が 72 の時候の名前になっており、約 5 日ごとの自然の変化を知ることで、きめ細かな季節の移り変わりを感じることができる。

3. 先行研究

3.1. 作品『四季折りおりオリ』は

2018年4月から2020年12月まで、来日してからの2年間の出来事を日記と年表にまとめたアートブックである。面白いこと、楽しいこと、辛いことの全てがつまった、留学生活の記

録としてまとめている。

日々の繋がりを意識するため、蛇腹で製本した。表面は絵と日記、裏面は2年間の日々を色で表現した年表にしている。子供の身長を記録するように、自身の成長の記録をまとめた(図 1)。

3.2. 作品『隅すみ』は

日常生活の片隅に存在する楽しい風景を描いた、文字が一切ないカレンダーだ。日付の代わりに、その月に合わせた小さな絵を描くことで、四季が緩やかに移り変わることを表現している(図 2)。

図 1　作品『四季折りおりオリ』　　図 2　作品『隅すみ』

4. 植物風景のある『隠しカレンダー』

まず、試作としては植物風景のある隠しカレンダーを制作した(図 3)。

季節の変化からイメージした 12 枚の花の絵を描いている。同時に、季節の変化をゆっくり表現するため、『隠しカレンダー』を試作してみた。これは、植物の絵の面にもう一枚日付けのある紙を被せ、30段の切り目をつけ、一日過ぎるごとに下から一段ずつを切り離していくものである。30日過ぎると全部が切り離され、下にあるこの季節の花見が出るようになっている。最後に気がついていなかった風景が出てくることで、予想外の面白さと気づきをもたらす意図がある。

これらの花の絵は、四季が緩やかに移り変わることを表現している。それぞれの季節が日本の自然の風景を彩り、楽しませてくれる。季節の移り変わりは繊細であり、一日、一日を大切に過ごそうという意味も込めた。

図 3『隠しカレンダー』

5. 絵本

「日本の草木染め」

絵本制作を通じ、日本の「草木染め」に使われている伝統色を表現することが考える。

また、絵本独自の閲覧性、多様性によって、より多くの若者に伝統を伝えていく(図 4)。

図 4 製本『草木染め試作』

5.1.「伝統色」

4月から次年の3月まで、春(茶色、緑、)、夏(青、紫)、秋(黄、赤)、冬(白、黒)季節の順序で色変化が見える絵本をデザインする。約16種類ほどの植物を編入し、日本の伝統色を紹介する。より繊細な色変化は絵本の染色で表現できる。

5.2.「形」

この絵本は、一目で色変化がわかるが、さらに植物を認知できるようにするため、草木の形を素材に写し出すことで面白さが増す。つまり、選んだ植物を「草木染め」した紙に彫りだすことで、その植物の葉、種などをより楽しむことができる。植物についての認識も深まるだろう。

5.3.「染色技術」

前述のように、植物の形と色を知る上で、「草木染め」技法を取り入れる。染料自体の採取時期による色の違いや、季節による染色の向き不向きがあるが、染色を行う季節は自然と固定されるものが多い。染色技術は古来より脈々と伝えられてきた。これらの伝統技法を絵本に用いしていく。

おわりに

2021年度は日本画、伝統色などの日本の文化的資産について調べた。各季節の代表的な風物が取り上げられている物を調査・研究した。四季と文化と人々の関係性を調査し、カレンダーを試作している。

空気感や季節の変化等の細かい移ろいを考慮しているデザインは多くない。本研究は、人々が自然の豊さを享受することができるグラフィックデザインを生み出すことを目指す。身近にあるすべての自然を新しい視覚的なデザイン言語として、作品を制作していく。

他参考文献

・ 小松　史枝、『季語にみられる色彩語の用法』、(2007/6/1 日本色彩学会)
・ 前田　于寸、『日本色彩文化史』、岩波書店、(1983)
・ 山崎　和樹、『草木染　四季の自然を染める』、山と渓谷社、(2014)
・ 吉岡　幸雄、『日本の色辞典』、紫紅社、(2000/6/1)
・ 東山　魁夷、『東山魁夷の世界』、美術年鑑社、(2005/4/1)